

# Gift for the Next 100 Years

Vol. 3

## いのちの宝物

東日本大震災で被災した方々のためにキャンプでできることは何かと模索しているとき、アメリカから「グリーン・キャンプを見においで」との誘いがありました。そのグリーン・キャンプとは、Camp Fire USA First Texas Council が 1988 年から行っている El Tesoro de la Vida です。

Camp Fire USA は 1910 年に設立された歴史ある団体で、キャンプだけでなく、幼児教育や学童保育のような子育て支援の事業も活発に行っています。そうした地域社会とのかかわりの中で「家族を失った子どもの精神的ケア」という課題に着目し、このキャンプを始めました。

El Tesoro de la Vida はスペイン語で「いのちの宝物」という意味ですが、El Tesoro は団体の所有するキャンプ場の名前でもあります。つまり「いのちについて考えるキャンプ」「いのちを見つめるキャンプ」という意味が込められているのです。

日本から 4 人が参加し、キャンパーと生活をともにしながら、このキャンプを学んできました。



## 93人のキャンパー

El Tesoro de la Vida のキャンパーは、近親者と死別した経験を持つ 6 歳から 17 歳の子どもたちです。地域の小児病院や司法機関、グリーンケアセンターなどを通じてキャンプの情報を得て、参加しています。死別の理由はさまざまで、病死、事故死、自殺、薬物等の過剰摂取、そして殺人というケースもあります。また、そのことによって生活環境の大きな変化を強いられた子どもたちもいます。

今年の参加者は 93 人。当初 100 人を超える申し込みがあったのですが、記録的な猛暑でキャンセルが相次いだとのことでした。キャンパーは年齢・性別で、3~8 人のキャビングループに分けられます。そこに 2~3 人のボランティアがカウンセラーとして加わり、1 週間をともに過ごすのです。



キャンプの最初に「一人じゃないよ」「楽しんでいいんだよ」と確認しあいます。

キャンプ初日、保護者に連れられてやって来た子どもたちは、受付が終わるとキャビングループごとに集まります。このキャンプには連続で 3 年もしくは 4 年まで参加することができるので、顔見知りのスタッフと親しげに話すキャンパーも見受けられます。しかし、ほかのキャンプと同じように、最初は様子をうかがうような静かな雰囲気です。

私は 9 歳から 11 歳の女の子のグループに入ったのですが、最初はなかなか会話も弾みません。しかし、寝食をともにすることで少しずつ関係が作られ、徐々に笑ったり、おしゃべりをしたり、泣いたり、少しケンカをしたりといったことができるようになっていきました。まだ大切な人が亡くなった悲しみや戸惑いの中にいるキャンパーにとって、仲間と生活をともにし、たくさん笑い、いっしょに悲しみ、学びを得て成長することが心の回復につながっているように感じました。

## グループセラピー

このキャンプの大きな特徴は、毎日 1 時間の「亡くなった人を思い、悲しむ時間」であるグループセラピーにあります。

家では亡くなった人の話ができなかつたり、泣くことができなかつたり、楽しむことに罪悪感を持つたりと、悲しみを表現できず実年齢以上に“大人”であることを自分に課している子どもたちがいます。ですから、ここではゲームをしたり、絵を描いたり、話し合うなど、年齢や性別に応じたさまざまなアプローチで、その人に対する思いや今の気持ちを表現することに取り組みます。

グループによってその進み具合は千差万別ですが、キャンパー

絵を描いたり、ゆっくり話をしたり、さまざまなアプローチが取られます。



亡くなった人のことを思うのはつらい作業でもあります。セラピストが個々の状況にあわせて対応します。

# エル テソロ デ ラ ビダ El Tesoro de la Vida

7月31日～8月6日 ● グリーフ・キャンプ視察報告

は少しずつつらい経験や気持ちを言葉や絵で表現するようになり、涙を流すこともありました。亡くなった人を思い、涙を流すのはとても苦しい作業です。しかし、キャンプ生活を通じて「仲間」になったグループのメンバーやカウンセラー、セラピストの前で気持ちを表現し、涙を流すこと、ほかの人の言葉に耳を傾け、寄り添うこと、そして、いたわりの気持ちで抱き合うことによって、一人ひとりが閉ざされた心を少しずつ解放することができたように思いました。

このセラピーはプロの心理セラピスト6人が分担して行うのですが、彼らの働きは非常に大きく、このキャンプの鍵となるものです。キャンパーの様子を観察し、カウンセラーにアドバイスをを行い、グループセラピーを進行する。時には、深刻な心理状況に陥ったキャンパーの処遇を判断しなければならないこともあります。その責任は非常に重いものですが、そんなことは少しも感じさせず、キャンパーやカウンセラーに気軽に声をかけ、プログラムをともに楽しんでいる様子には、心理のプロであると同時にキャンプのよき理解者であると感心するばかりでした。

## FUN! FUN! FUN!

このキャンプでセラピーは大きな意味を持つものの、時間としては全体の10%ほどに過ぎません。あとは楽しいキャンプの時間です。

アクティビティは、乗馬、水泳、ディスクゴルフ、アーチェリー、釣り、カヌー、クラフトといった伝統的なキャンプのプログラムから選びます。夜には、地元のボランティアが用意してくれた夜店、マジックショーに映画鑑賞、ダンスパーティと、毎日、楽しいプロ



連日40度を超える猛暑だから、プールは最高の楽しみです。

楽しむ時は徹底的に。スタッフが扮装して朝食がパーティになることも。ちなみに、右からセラピスト、キャンプディレクター、ボランティアコーディネーター、The Cat in the Hatです。



グラムが用意されています。もちろん、食堂に集まってみんなでご飯を食べるだけでも大騒ぎです。

キャンプの初日、いちばん最初のセッションで主任セラピストから「つらい思いをしているのはあなただけではないから、その気持ちを表に出していいんだよ」ということとともに「思いっきり楽しんでいいんだよ」ということを伝えます。そして、その言葉のとおり思いっきり楽しみます。グループセラピーの後は、泣いていたこともすっかり忘れたような歓声がキャンプ場のあちこちから聞こえてきます。思いっきり笑って、いっぱいふざけて、キャンパーは年相応の「子ども」に戻るのです。

## 社会に働きかけるキャンプ

滞在中、私たちは新聞とラジオの取材を受け、現地の日米交流協会のレセプションに参加しました。新聞には一面に大きな記事が載り、私たちは逆に感謝されることになりました。

このキャンプは、セラピストなどの一部の専門職を除いて、ほとんどすべてのスタッフが無償のボランティアとして参加します。それでも総勢170人にも及ぶ人が1週間を過ごすためには、キャンパー1人あたり約1,000ドルのお金が必要です。キャンパーは参加費を払うことになっていますが、経済的に厳しい家庭もあり、支払いが免除される場合も多いので、資金集めはこのキャンプの継続にとって非常に大きな課題です。

資金集めのためパーティを行い、取材対応をするのは大変な労力です。それをいとわないのは、グリーフ・キャンプという耳目を集めるプログラムを通じて、キャンプの意義を多くの人に知ってもらうことに意味があると考えているからです。ここに社会をよりよいものにするために、積極的に働きかけるキャンプの姿を見ることが出来ます。

専門家との連携や資金集めなど、超えなくてはならないハードルはたくさんありますが、日本のグリーフ・キャンプをつくるためのたくさんの学びがあった1週間でした。

(木本多美子)



キャンプの最後に植樹をし、その根元に各自が亡くなった人を思って描いたストーンペインティングを置きます。

本コーナーでは、グリーフ・キャンプ・プロジェクトに関する情報を継続してお伝えします。